咸錫憲における「受難の女王」解釈の推移について

朴^{ハク} 賢^{ヒョム} 淑^ス

A change in the interpretation of 'Queen of Suffering' in HAM Sokhon.

PARK Hyunsuk

The Ssial thought of HAM Sokhon is based on a Biblical historical view and hardship. He used the symbol 'Queen of Suffering' as an interpretation of Korean history. 'A woman in the pain of labor' was a 'Queen of Suffering' to him. In fact, the Ssial thought of HAM Sokhon completes the idea that one must strengthen one's mind, train hard and resist suffering. In this way, an old woman comes to realize from within that some things cannot be taken away by others. What kind of changes occurred in HAM Sokhon that led to his Ssial thought? He added a study of Eastern classics to two of his main lines of thought (the first line was about the common people and the second line was about history) in 1935.

はじめに

咸錫憲^{ハムソクホン}の思想における「受難の女王」のモチーフとは、「いやしい女であるとしか思われなかった韓国の歴史が聖書と思想的な思索により、実は王冠をかぶった女王であることに気づく」という逆説的真理に由来している。

咸がこの「受難の女王」(もしくは「歴史の道端に座っている年老いた娼婦」)思想を用いるようになったのは、雑誌『聖書朝鮮』に「聖書の立場から見た朝鮮歴史」を掲載していた一九三四―三五年のことであった。この頃の咸錫憲は三十代の青年教師で、若い学生たちに自国の歴史を教える教師という職業を自分の天職と信仰的に認識して歩み出していた時期であった。また、一九三〇年代当時の東アジアは満州事変(一九三一年)、日中戦争(一九三七年)、太平洋戦争(一九四一―四五年)までの一五年戦争の只中にあった。

咸錫憲の「シアル(民衆)思想」は、次の二つの観点を土台に成り立っていると言いうことができる。第一は、その聖書観と歴史観が土台になっていることである。第二は、苦難がその基調となっている点である。咸錫憲は連載論文でガンディーの「苦難は生の原理である」という言葉を引用し、苦難を消極的に捉えることをしないで積極的に受け入れ、生の原動力にまで昇華することを促している。シアル思想が思想としての広がりを持つようになったのは、苦難に裏打ちされた咸錫憲の生き方とその実践がその原動力となった。

上記の第一は、咸錫憲が東京師範学校文化一部に入学し、友人の金教臣の案内により内村鑑三に出会ったことが直接的な契機となっている。⁽¹⁾と云うのは、咸錫憲が内村鑑三に出会った一九二四年の三月、内村は『苦痛の福音』について講義をおこなっている点は興味深い。また第二に内村は、マタイ福音書におけるイエスの受難の研究「十

字架の道」を講じている（一九二五年二月―二六年三月）。

これまでのことを踏まえて、本論文はすでに述べた二つの思想的特徴を土台に、どのようにして彼独自のシアル思想が生み出されたのかについて考察するものである。

咸錫憲における苦難に関する先行研究については、池明観チミンクワンの論文を挙げることができる。⁽²⁾ 彼は咸錫憲の「苦難の僕」に言及し、その韓国史観を内村の弟子の一人藤井武における日本史観と比較考察している。咸錫憲と藤井、両者の共通点を「世界史における東洋の台頭を認識した点、そしてイザヤ書の苦難の僕像を通して自国に対する徹底的なまでのピューリタニズム的批判を行った点である」と論じている。

また、『現代史を生きる教会』の中で、池明観は一九三〇年代、日本と韓国の両キリスト教会における見解の相違について論じる際、海老名弾正と咸錫憲を取り上げている。そして、海老名が典型的なブルジョワ的樂觀論を持っていたことに対して、咸錫憲は苦難の現実においてなおも新郎の王は必ず来るといふメシア思想を持っていたと言及している。⁽³⁾

池明観が咸錫憲の苦難を藤井武と関連づけ比較研究を行い、両者の共通点をピューリタニズム的な自己批判としたことは評価すべきである。しかし、咸錫憲の「道端に座った年老いた女」「お産のため苦しむ女」の「いやしい女」とは、「受難を通して」⁽¹⁾ については「女王」となる逆説的な希望のメッセージが含まれているのである。

咸錫憲における苦難に関するもう一つの先行研究は、金晟秀キムソンヌの研究がある。金は、咸錫憲はキリスト教を東洋の古典を通して再解釈し、宗教多元化時代を生きる人々に生き生きとしたメッセージを与えるものであり、⁽⁴⁾ 韓国の歴史が「苦難の女王（Queen of suffering）」という屈辱だけでなく、世界の不義を浄化できる場であり、「歴史の担い手」とを、日本の統治により支配された韓国民族というふうにナショナリズム的に捉えないで、抑圧にあえぐすべ

ての弱者とシアル（民衆）を指すと、言い切ったのは評価されるべき点であるとしている。ところが、苦難と咸錫憲の思想について、金の独自の主張点が明確に提示されていない。

一 咸錫憲の「受難の女王」像

最初に、一九三四年から三五年にかけての雑誌『聖書朝鮮』に連載された咸錫憲の論文「聖書の立場から見た朝鮮史」の中で、「受難の女王」はどのような文脈で引用され解釈されたのかについて考察したい。「受難の女王」に関する記述は、連載論文の最初と最後の三回にわたって成されている。

第一回目の記述は、連載論文「(五) 韓国史の基調」においてである。⁽⁶⁾ 当時の心的状況について咸は、「世界各国がそれぞれハナニムのところへ持つていく土産物があるが、われわれにある物と言えは貧しさ⁽⁷⁾と苦難だけだと思ふと頭がくらくらとして来た。……韓国は一体何を残し、何を誇るつもりだろうか？」と叙述している。このような悩みの末、彼は、「聖書は真理を示してくれた。私を救ったのは信仰であった。この苦難こそ韓国がかぶる茨の王冠であると教えてくれるのであった。そして、それは世界の歴史をひっくり返して裏面を見せてくれるものであった。世界史全体が、人類の進む道の根本が元々苦難であると悟った時、今まで虐待される端女^{はじめ}としか思わなかった彼女は、いばらの王冠をかぶった女王である」⁽⁸⁾ ことに答えを見出したのである。

第二回目に「受難の女王」が引用されているのは、「(六) 地理的に決定された韓国史の性質」においてである。⁽⁹⁾ 咸は地理的な位置、地勢、気候、景観で決定された韓国史の性質を「受難の家」という苦難の歴史にならざるを得ない、と捉え、次のように付け加えている。「私はわれわれの運命を考えるたびに、タゴールのギーターンジャリの

一節を思い出す。われわれ自身の歌を歌わなければならないところだが、苦難があまりにも息苦しくてそうなったのか良い歌がわれわれにない。他人のものでも借りることにしよう。

引き続き引用されているのは、ヒンドゥー教の背景を持つタゴールの宗教詩『ギーターンジャリ』の英訳散文「第四 受難の女王」の全訳である。⁽¹⁰⁾「おお、わが愛よ、あなたは多くの人の後のどの陰に隠れておられるのか？ 人々はこのほりつばい道路で、あなたを分からず押しのけて過ぎて行きました。私がここであなたに差し上げる贈り物を広げて長い間、退屈して待っている間、道行く人々が私の花を一つ二つと取って行き、今や籠は殆ど空になってしまいました。……家路をたどる人々が私を見てあざ笑ひ、口をとがらします。私は乞食娘のように顔を裾に隠して座って、どうして座っているのかと尋ねる彼らに、目を伏せて答えもしません。おお、あなたを待っていると、あなたが来てくれると約束したことを、どうして人たちに言えるでしょう」⁽¹¹⁾。

ここで咸錫憲がタゴールに共感しているのは、絶対者への愛と苦難を強いられている自国への愛である。その二つの愛が共通していたために、「韓国の民族こそが道端に座っている乞食娘であり、受難の女王だ。差し上げる花はみな奪われ、分別もなく王妃を夢見ると嘲笑され、むなしく思いこがれて疲れ果てた歴史である。それでも新郎の王は必ず来ることだろう」と共感しているのである。

一般的に、「韓国の神学の定礎期」と言われている一九三〇年代は、プロテスタントが伝来して半世紀を迎えた時期であった。一九二〇年代から増加し始めたキリスト者の人口は一九三〇年代に入って三七万人に達した。キリスト教界は内的に成熟していて、日本の文化政策により外国で訓練を受けた韓国人神学者たちが多数帰国して活躍しており、初めて韓国人神学者たちによる神学書が刊行された時期である。ところが、当時の韓国キリスト教界は自分たちの信念を他の宗教思想にまで掘り下げ議論し合うまでには至らなかった。そのことから考えると、咸錫憲が

その連載論文でタゴールやヒンドゥー教を受容したという宗教思想的な展開は、朴在淳が指摘しているように、無教会の仲間からも「脱キリスト教的な思想を展開している」とまで評される程、当時としては急進的リベラルな試みであったと言うことができる⁽¹²⁾。

一九三四年、咸錫憲が「受難の女王」を引き合いに出したのは論文の前半においては、歴史の中に働く神の意志を探そうとして得た結果であつたと認識することができる。そこには歴史教師として、若い学生たちに歴史を背負うことで降りかかる多くの苦難に負けないで、立ち向う勇氣を持つて、世界に貢献できる人物として育ててほしい、という咸錫憲の願いが込められていることは言及するまでもない。

それでは、第三回目の論文後半（一九三五年）における「受難の女王」引用について、焦点を当てることにしたい。「(三四)生活にあらわれた苦悶の姿」に言及されている「受難の女王」は、苦難の具体的な形としてロダンの彫刻作品である「美しかりしオーミエール（娼婦であつた女）」（二八八八年作）が示されている。

すなわち、「これで私はつたない手で画を描くのをよすことにする。その美しさを傷つける心配よりは、その醜い、そのみじめさをそのまま表現できないからである。けれども私は名工を代りに立て、読者の前に最後まで述べさせることにしよう。あなたたちはフランスの名匠ロダンの『娼婦であつた女』という彫刻を見たことがあるか。私はそれが韓国の姿に思えてならない」。その女の姿とは、「一人の老女が上半身をまえにかがめ、片方の手を背中にまわし指を曲げて苦悩をあらわし、一方の手を垂らして力なく腰掛けを握つてまたがって座つており、頭を深く垂れている。全身の肉は震え、やせた骨が突き出て、首はぐつと落とし、胸はぐつとへこみ、極度の老衰を見せている。彼女はその一生を殆ど他人のために生きた。抑えられ、踏みつけられ、品物のように計りにかけられ、低く扱われた。それだけでなく、自らを軽蔑し、自分を失つた女⁽¹³⁾」なのである。

「その女に向かつて輕蔑のつばをはいた」咸錫憲を、「その女は離さなかった。うつむいて見向きもしない目を閉じたままの口は、それ以上を要求した」のである。その時、咸錫憲は気づく。「そうだ。それ以上のことがなければならぬのだ。単なる悲しい感じや輕蔑の念以上のことを彼女に与えなければならぬ。彼女は社会の罪惡を代わって背負っているから」⁽¹⁴⁾である。

この部分における「受難の女王」以降の記述は日本總督府の検閲により削除される、というまた新しい苦しみに直面することになる。実際、咸錫憲の連載論文は削除されていたにも拘わらず、雑誌『聖書朝鮮』（第八三号）の目次には、咸錫憲の論文のタイトルである「(一四) 苦難の意味」と「(一五) 歴史が示すわれわれの使命」が明記されていて、苦難の只中においても機知を駆使した『聖書朝鮮』の編集者である金教臣の勇氣を垣間見ることができ

る。

連載論文「聖書的立場から見た朝鮮史」で検閲により削除され、後に著作化されて明らかになった部分は、次のように結ばれている。すなわち、「他人ごとのように眺めていたその痛ましい形相は、苦難の川に映ったわれわれ自身姿である。それゆえ、一歩進めなければならぬ。われわれ自身を苦難者と意識し、受難者の心情で痛みを体験しなければならぬ。苦難の杯を蜂蜜のように甘いと感じなければならぬ。その重い荷を高い岩の上におろし、苦難の意味をさやかに語ろうではないか。お前も私も受難の乞食なれば」⁽¹⁵⁾。このような「私自身が背負う十字架」という克服の考え方は、シアル思想が展開する中でその核心的な部分の一つとなっていくのである。

二 「受難の女王」 解釈の推移

それでは、連載論文のタイトルが「聖書的立場から見た朝鮮史」であったものが、単行本化された時に『意味からみた朝鮮史』と変わり、咸錫憲が講演会でしばしば用いている「産みの苦しみをする女」は、彼の「受難の女王」モチーフとどのように関係しているのかについて考えていくことにする。すなわち、苦しむ「女」と苦しむ「女王」とは、どのように関係しているのかについてであるが、結論から言うと、咸錫憲においてこの両者は同一線上にある。つまり、歴史の道端に座る老いた娼婦である「女」とは、実は「受難の女王」であり、咸錫憲において苦しむ「女」は同時に苦しむ「女王」なのである。「女」と「女王」を区別して論じたというよりは両者を同一のものとして論じた、と捉えることができる。「苦しむ女」はいつか「受難の女王」として昇化される、ということの当然性を示しているのである。そして、その昇化こそが読者である私たちが目指して進むべき道なのである。

咸錫憲の「受難の女王」に関する言及をここでは、特に一九六〇年代と一九七〇年代に焦点を当てて取り上げていくことにする。まず、一九六〇年代においてであるが、時代的な背景として長期政権を担った李承晩政府に対抗し大学生たちによる四・一九革命が起き、多くの学生が犠牲となった。さらに、翌年の五月一六日には、朴正熙による軍事クーデターが起き、独裁政権が樹立された。朴政権が樹立した翌月、咸錫憲は軍事政府に反対する内容の論文「五・一六をどのように見るのか？」を発表し、そのために軍事政権と「非暴力の戦い」を続け、受難の道を歩むことになる。ちょうど同じ時期に書いた論文「新しい国をどのように建てようか」に「受難の女王」が引用されている。⁽⁶⁾

すなわち、「(韓国)これまでの差し迫った危機は、千年以来、すべての歴史的な失敗と罪惡から生じたものであります。これは政治的な問題だけでなく、思想的な問題から来るものであるゆえに、その及ぼす影響もより大きく、より深いのです。……私たちはこの歴史的な現実の意味をよく認識し、重大な責任を果たすべきです。この危機はまるで産みの苦しみのようなものです。産まれないと母子共に死ぬことになりましたが、産まれば次の世代が始まることとなります。私たちの苦しみは国を産むための苦しみであります。産みましょう！ ある力を全部絞って！」⁽¹⁷⁾ というように、一九三五年連載論文と同じく「受難の女王」が引用されている。しかし、それぞれが置かれていた時代背景が異なっていることから、この一九六〇年代に咸錫憲が「受難の女王」を引用した意図は、一九三五年の当時とは異なっていると考えることができる。

次に、一九七〇年代における「産みの苦しみをする女」に関する言及を取り上げることとする。一九七三年一月号の『シアレソリ』(씨알의 소리 「シアルの声」の意)に掲載された論文「世界の救いと良心の自由」には、「受難の女王」がその結論の部分で用いられている。まず、この論文が書かれた一九七三年がどのような時期であったのかを知る必要がある。一九七〇年に咸錫憲は雑誌『シアレソリ』の創刊を大変苦しい中で断行する。ところが、それも創刊早々の翌月、当時の政権によって雑誌出版の認可が取り消されるようになる。このことに対し、咸錫憲はすぐ無効訴訟を起こし、その結果、七一年の七月「認可取り消しは違憲」という最高裁判の判決を勝ち取るまでに到る。

ところが、咸錫憲のこのような必死の努力にも拘わらず、独裁政権は憲法を変え長期政権を実現していく。そのような政治的な抑圧からの突破口を求めて、咸錫憲は自分の思想を深く掘り下げ深めていく対策をとるに至る。そして、ちょうどこの時期から彼は、カトリック女子学生会館で東洋の古典である老子・莊子の研究とその講義を始

める（一九七一年四月）。その二年後である一九七三年の十二月からは、日曜聖書講座もソウルや各地方で開き、思想的な思索を深め、そこで得た思索を通して仲間たちを慰め、励ましている。

一九七三年八月には、当時野党の金大中が滞在先の東京で拉致される事件が起きた。その十月にはソウル大学法学部の최정길（チェジョンギル）教授が謎の死を遂げるなど、独裁政治の暴走は著しいものであった。それに歯止めを掛けたのが、咸錫憲の時局宣言である（二月）。言論の自由や思想の自由を叫びついに立ち上がったのである。連日デモが行われ、日々多くの学生や教授が捕らわれていく中で、一九七七年七月八日、キリスト教教授協議会主催の「受難の兄弟たちのための祈禱会」が行われ咸錫憲が講演を行い、次のような「受難の女王」の比喩を用いている。

「（産母の苦しみ）苦痛なくして、生きた教育はできません。シアルの教育は、まさしく苦難を通じて受ける教育です。……それではこの苦痛、このいわれのない苦痛は、なぜ生まれて来るのか。宗教的に言えば、神がわれわれを教育するために下さったものだ、と言えるでしょう。……一人の国民が、人の子イエスを受胎しました。新しい時代を受胎したのです。その子が生まれようと、陣痛を迎えている、そしてそれに伴う苦痛に、少しでも我慢する。歴史がシアルの中に植えた、この子を産むためには、必死の力を振り絞らねばならないでしょう。これがまさに、人生と民衆に与えられた神話の教訓です」⁽¹⁸⁾と述べている。

一国民が人の子イエスを受胎し、まさに今、「新しい時代」という子を産むための苦しみを経験している、ということである。そして、このことを彼は、また歴史がシアルである民衆の中に植えた子を産む、ということであるとも理解している。すなわち、一国民が人の子イエスを受胎し、産むための苦しみを経験するということは、歴史において私たちシアル（民衆）自らが「新しい時代」という子を産むために経なければならない産みの苦しみなのだ

というのである。この続きとして、咸錫憲は「身籠った者がいるのに、誰が産めないようにさえぎる？」⁽¹⁹⁾と、イザヤ書五三章を引用しているのである。

この「受難の女王」とは、苦難を伴う実践の中で咸錫憲が用いた聖書的で思想的な題材であるが、咸錫憲は連載論文の始めにその歴史認識が宗教的で、聖書に基づく終末観に立っていることを明確にしている⁽²⁰⁾。また、咸錫憲が「受難の女王」をモテーフに論じる際、しばしばイザヤ書における「苦難の僕」像の解釈が取り上げられている。しかし、筆者はむしろ、「産みの苦しみをする女」そのものの聖書の釈義を通して、「受難の女王」を解釈していくことを提案する。なぜなら、咸錫憲におけるメシア思想は「産みの苦しみをする女」がその核心部分となっているために、「苦難の僕」よりは、聖書の「産みの苦しみをする女」に秘められた「受難の女王」像を通して咸錫憲独自の思想が展開されていた、と捉えることができるからである。「産みの苦しみをする女」とは、ヨハネ黙示録一二章でヨハネがパトモス島で見た幻であり、「創造的な産みの苦しみ」であると同時に、「新しい時代」という子を産むための、苦難を受けている現在においてなおも未来の希望が先取りされていて⁽²¹⁾、男性性よりは女性性が強調されているのである。

それでは、「産みの苦しみをする女」が聖書ではどのような場面で用いられているのかを論じていくことにする。聖書では非常に厳しい苦痛の状況を描写する際、よくこの「産みの苦しみをする女」が用いられて来た。

例えば、エレミヤ四章三一節では、「まことに、産みの苦しみのような声が聞こえる。／初めて子供を産む女のような苦しみの声が／あえぎながら手を伸べる娘シオンの声が。／『ああ、殺そうとする者の前に／私は気を失う』と記されている。この箇所は、エレミヤ書全体の中で神の怒りに関する最も劇的な場面である。預言者エレミヤが、北イスラエル王国と南ユダ王国の王たちやイスラエル民が異教礼拝する行為に対して、「背信の女イスラエル」

「裏切る女、妹のユダ」、という表現で皮肉のこもった辛辣な叱責をしている。このことは、次のことを意味しているのである。預言者には彼女（ユダ、イスラエル）の結末の姿が眼に浮かぶ。初児を生む女の発するような、未知の苦痛に圧倒されたかん高い叫びである。しかし、それは母親になろうとしている若い女性の叫びではなく、自分が被害者の手にかかっていることを知って、絶望の腕を虚空に投げ出し、憔悴し切ってくずおれる哀れな女のうめきなのである。⁽²²⁾

また、ヨハネの黙示録一二章の二節と四節には、次のような「産みの苦しみをする女」の描写がされている。すなわち、「女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。……竜の尾は天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べべてしまおうとしていた」。

これらの箇所で、「竜」と「女」は、対立する形で登場している。この竜は子供が生まれて来たらそれを食い尽くそうと待ち構えている。ところが、女が産んだ男の子は神のもとへ引き上げられるようになる。⁽²³⁾ 竜は玉座で守られている子供を得ることができなかったが、子供は死を免れて神の御前に行けたのではないことは確かである。まさに死ぬことによって、イエスは竜に打ち勝ち、神の右側に挙げられたのである。サタンの天からの追放は、地上におけるキリストの勝利の結果である（一二章一〇―一一節）。

一方、神の民であり、メシア的共同体、教会でもあるこの女性性は、地上に残る。竜はその男の子を追いかけるのではなく、女の方を追いかけるのである。竜は敗北し、天から追放され、この女に最後の怒りと不満をあらわにする。しかし、キリスト（男の子）が神によって守られたように、「女」も苦難の中でもキリストの教会もまた神によって守られ、荒野にある「神によって備えられた場所」で、かくまわれ、養われる、というしるしなのである。

これらそれぞれのことから、聖書で描かれている「産みの苦しみをする女」とは、偶像礼拝に走ったイスラエルの民に対する滅びの預言の側面と、今受けている苦しみはやがて生まれ出る子に会えるという期待が伴う励ましの預言という二つの側面があることがわかる。この二つの例は、咸錫憲においても同様な意味で用いられていると言えることができる。すなわち、この「受難の女王」のモチーフを通して、預言者エレミヤのように、神からの覚醒の声を人々に伝えその罪の道から立ち返ることを警告する咸錫憲の姿と、ヨハネ黙示録のヨハネのように、政治的、軍事的にこの世を治めようとする勢力が今は繁栄し、その猛威をふるっている、イエスのように仕え、そのいのちをも惜しまない人々は、ついに神により守られ、勝利するという幻である。

このことを韓国の歴史に置き換えると、今直面している苦しみはこれまでの歴史の報いであるという審判のメッセージであると同時に、やがては希望へと変わるというメッセージに他ならない。咸錫憲はこのことを次のように説明している。すなわち、「今日の韓国の状況から考えると、ここにわれわれの希望があるとは信じがたい。だが、信仰によって信じるようになる。常識のある人なら、誰も韓国が世界的使命を果たし得るとは思わないだろう。すべての判断の基準が変わらない限り、そのようなことはあり得ない。ところが実際に判断の基準が変わることがある。それが信仰の世界だ。信仰は世界をひっくりかえす。……考えてもみよ。ある行列がある目標に向かって進むのに、途中で今まで目標だと思っていたのが、本当の目標の反対側の空に映った虚像だとわかった時、どうするだろうか。そして、行列に向かって『回れ右、前へ！』と号令すると、どういう現象が起こるか。それこそ先の者が後になり、後の者が先になるではないか」と、逆説の展開を主張している。また、この逆説の展開を通して「産みの苦しみをする女」が「受難の女王」となるメッセージが示されているのである。

三 シアル思想が生み出されるまで

これまで、「受難の女王」に関する咸錫憲の引用とその置かれていた状況を一九六〇年代と一九七〇年代とに分けて考察してみた。そして、聖書における「産みの苦しみをする女」とは、どのような文脈において用いられ、それが咸錫憲においては「受難の女王」として示されるようになったのかについて明らかにした。それでは、咸錫憲においてシアル思想が萌芽するまでに何を克服することによってどのような独自性が加えられていったのかを取り上げることにする。

第一の特徴として挙げられるのは、その民衆観である。咸錫憲は連載論文を書いた一九三〇年代当時から、その思想が民衆観に基づいていた。例えば、彼は連載論文の中で「新しい宗教」を通して国と世界を建て直すことを模索している。その「新しい宗教」に課せられたものを咸錫憲は第一に、階級主義を打破すること、第二に、「事大思想」⁽²⁵⁾を排除すること、第三には、宿命論の迷信を無くすことである、と述べて、それらの課題を克服した歴史の例を「東学」に見出しているが、それは「東学が」⁽²⁶⁾外からの刺激を受けて目覚めた、一種の自覚運動であることに意義がある⁽²⁷⁾ことに高い評価を与えていたためである。

そうすると、咸錫憲は民衆の一人としてどのような役割を果たしたのか。彼は自分自身を民衆の一人として認識し、自覚を持って民衆としての使命と役割を担おうとした。それは国の独立を民衆に直接与えた神が、今度は民衆に自ら苦難を担い任された使命を担うことを願っていることを認識していたからである。

そして、この自覚は、「苦難を通して」のみ得られる代価である。そのため、この苦難の道を民衆も自ら背負う必

要があるのである。「苦難はわれわれ生命の避けられない一つの条件である」ため、咸錫憲も民衆の一員として自らの使命を担い、その苦難を自ら背負うことを通してシアル思想を打ち出すことができたのである。

第二のシアル思想の特徴として、その歴史観を挙げることができる。咸錫憲が独自の歴史観を持っていたことは、次のようなことを通して知ることができる。一九四五年八月一日、日本の敗戦を通して得た国の独立を迎えた際、それほど待ちに待った国の独立を彼は、「失敗の解放」というように皮肉をこめて表現している。なぜなら、韓国が国を取り戻したのは自らの力ではなく、外から与えられたものであると認識していたためであった。独立を得ても多くの人々は与えられた自由に喜ぶだけで、自ら自分たちの歴史を切り開いて行こうとする意志がないことを警告するためであった。

彼は歴史から見た「近代化」を単なる欧米化、機械化を意味するものとして捉えないで、「自我の発見」として捉えていた。⁽²⁹⁾つまり、現代社会が近代化に突入したということは、民衆（シアル）自らが歴史を動かす主体であり、自らが歴史を開いて行く自覚を持つことを意味しているのである。

第三に、シアル思想が生まれるまでには第一と第二で述べた民衆観、歴史観に加え、東洋古典への研究が行われている。このことについては、「苦難」の理解を例に取りあげることとする。連載論文を掲載していた一九三五年には「苦難」を克服することをガンディーの言葉に勇気づけられた咸錫憲が、半世紀が過ぎた五十年後の一九八二年、民衆化運動の最中に行われた講演会では、東洋古典の研究で、より深められた苦難理解を見ることができると述べている。すなわち、「聖書でわれわれはよいことを学びます。苦勞というのはすべて、神が思うところがあつて、われわれに何かを教えようとして苦勞をさせるのだということです。……天がある人を選んで用いようとする時は、その人にとりわけて苦勞をさせる、そうしてこそ、その心の不充分だったところが段々と埋め合わされ、選ばれるに足る資格

も出来るのではないか、というのが孟子のとても有名な言葉です」⁽³⁰⁾⁽³¹⁾

この苦難の説明において、連載論文執筆期の一九三五年当時と一九八二年の講演会とは古典引用をするという明らかな相違が見られる。このことは五十年の間、咸錫憲がキリスト教の「苦難の真理」を東洋的な文脈で再解釈することで、キリスト教が渡来したことで断絶されていたそれ以前の韓国思想と歴史の脈絡をつなぐことを試みたことがわかる。

すなわち、これまでのことから咸錫憲のシアル思想が生み出されるまでは、一九三五年当時から土台となったその聖書観と歴史観に加え、東洋古典への研究が加えられたことがわかる。このことは、キリスト教という真理を西洋のものでない私たちが生きている場としての東洋のものとして受け入れようと努めた咸錫憲の形跡がうかがえる。

結び——「受難の女王」に秘められた奥義

最初に連載論文に自国に対して「受難の女王」という徹底的な批評をすると同時に、未来への希望が含まれていることに触れた。続いて「受難の女王」解釈とその推移をめぐって、咸錫憲がよく用いた「産みの苦しみをする女」と「受難の女王」とは、どのように関係しているのかについて考察を行った。さらにシアル思想が生み出されるまで咸錫憲においてどのような気づきがあったのかについて言及してきた。一九三〇年代は若者たちに自分の国の歴史を知らせ、それを愛し、明日への希望を持たせるためのものであったものが、一九六〇年代においては、民衆に近代化における自我の発見を促し、歴史の主人公としての意識を持つことを促した時期であった。それが一九七〇

年代に入っては自ら民衆の一人として抵抗運動を続ける一方、東洋古典の研究を通してキリスト教の真理を再解釈することに尽力し、韓国史における思想上の断絶をつなぐ役割を果たした、ということが言える。

それでは、本論文の結びとして「産みの苦しみをする女」もしくは「受難の女王」に秘められたシアル思想の核心となる奥義とは何か。そのためには、なぜ「シアル」という言葉を選んだのかということについて知る必要がある。

「始めにこの集まりを計画した時（一九七二年）、名前を何にしようか色々意見が出たが、その中で修練という二つの文字を選んで付けたことにした。それは我々の目的が単純な親睦や事務的な討論や、あるいは何か大きな運動にあるのではなく、逆に我々自身を発見し、育てて、アル（中心）となることにある、その内容をあらわすためにそうしたのであった。……磨いて、修めて、練って、鍛えて。……われわれの性はまさに天そのままであり……決して最初から出来上がっているということではない。……授かった状態そのままでは、神のつくられたそのままではあるが、それは中であり、未発である⁽³³⁾。すなわち、未発のものが出来上がったものになるには、磨き、修め、練り、鍛えという産みの苦しみを経てこそ、他人が奪うことが出来ない本性の自分（アル）が存在することに気づいたのである。

そして、「世界史の道端に座っている年老いた娼婦に、彼女が奪われたものは真の自我ではなく、自我の皮と肉であることをしらせ、まだ彼女の中には誰も奪うことの出来ない永遠の処女性が存在していることを知らせることで」、女はくじけていた自分に勇気を取り戻すことができるのである。アジア大陸の道端に座っている年老いた女は、他人が奪うことが出来ない本性の自分（アル）が存在することに気づくのである。

弱く力のない者であるがゆえに無くした自信を実は自分が奪われ失われたものは体の外側だけで、まだ自分の中

には誰も奪うことの出来ない神から与えられた本来の自分が存在している、ということを知った時、女は勇気づけられ本来の自分を取り戻すことができる。そして、自分を磨き、修め、練り、鍛えという産みの苦しみを自ら受け入れる用意ができるのである。そこで、はじめて世界の中で自分が果たすべき使命と役割がたいに見えて来るのである。このような「受難の女王」に象徴される個々人の内面からの思想の転換こそが、シアル思想に秘められた奥義であると言いうことができる。

註

- (1) 拙稿「咸錫憲におけるシアル思想の萌芽（内村鑑三との関係を中心に）」関西学院大学神学研究會、二〇〇四年。
- (2) 池明観「咸錫憲の朝鮮史に関する一考察——藤井武の日本史観との比較を中心に」『翰林日本学研究（第四集）』ソウル、一九九九年。
- (3) 池明観『現代史を生きる教会』新教出版社、一九八二年、三〇一—三〇二頁。
- (4) 金晟秀『咸錫憲評伝』図書出版사인, ソウル、二〇〇一年、一七六頁（彼は、イギリスで *An examination of the life and legacy of a Korean Quaker, Ham Sokhon: Voice of the People and Pioneer of Religious Pluralism in Twentieth Century Korea* を書き、その論文をハングルでまとめ、『咸錫憲評伝』をあらわした）。
- (5) 泉政典『ヨハネの黙示録を読む』新教出版社、二〇〇三年、一一六頁。
- (6) 雑誌『聖書朝鮮』（一九三四年六月号）に収められている。日本語訳、咸錫憲『苦難の韓国民衆史』（咸錫憲全集第二巻）新教出版社、一九九三年（第二版）、七〇—七一頁。（原題は『聖書の立場から見た朝鮮史』。一九三四—三五年まで金教臣、咸錫憲らにより編集された雑誌『聖書朝鮮』に連載されたものであるが、一九六二年改訂版を出す際、現在のタイトルに変わっている）。

- (7) 前掲書、七一―七二頁。
- (8) 前掲書、七二頁。
- (9) 前掲書、八一―八二頁。雑誌『聖書朝鮮』(一九三四年七月号)所収。
- (10) 拙稿「咸錫憲におけるシアル思想の萌芽——受難の女王を手がかりに」『神学研究』(第五四号) 関西学院大学神学研究会、二〇〇七年、一二七頁を参照。
- (11) タゴール『タゴール詩集』渡辺照宏訳、岩波文庫、一九八八年、二六一―二六二頁。
- (12) 박재순 (朴在淳)「咸錫憲の思想形成とその展開過程」シアル思想研究会、ソウル、二〇〇六年、一三頁。
- (13) 『苦難の韓国民衆史』三五六頁。雑誌『聖書朝鮮』(一九三五年十一月号)所収。
- (14) 前掲書、三五六―三五七頁。
- (15) 前掲書、三六二頁。
- (16) 元々、雑誌『思想界』(四・五・六月号)に掲載された文。後に、タイトルを「새나라 꿈을 거림 (新しい国の鼓動)」と変えて著作『人間革命』に収録された。
- (17) 「새나라 꿈을 거림 (新しい国の鼓動)」『인간혁명의 철학 (人間革命の哲学)』(함석헌전집 제2권, 한길사) ソウル、二五九頁。
- (18) 「受難の兄弟たちのために」『シアル革命の夢』(『咸錫憲全集』第八卷) 高崎宗司監修、新教出版社、一九九二年、一九五頁。元々、『シアレソリ』(一九七七年七月号)に掲載されたもので、同年七月八日、キリスト教教授協議会主催で開かれた「受難の兄弟たちのための祈禱会」で行った講演原稿。
- (19) 前掲書、一九五頁。
- (20) 『苦難の韓国民衆史』三七―三九頁。
- (21) 泉政典『ヨハネの黙示録を読む』新教出版社、二〇〇三年、一一六頁。

- (22) A・ワイザー『エレミヤ書——私訳と註解』月本昭男訳、A・T・D・N・T・D聖書註解刊行会、一九八五年、一五〇—一五一頁。
- (23) 佐竹明『黙示録の世界』一九八七年、新地書房、一二六—一二七頁。
- (24) 『苦難の韓国民衆史』三七—三七二頁。
- (25) 事大主義(사대주의)とも言われる。「大」に「事(つか)える」という考えと行動を表す語。外交政策の一つでもあった。
- (26) 東学とは一八六〇年に始まった宗教団体で、欧米で始められた西学(欧米的なもの)の反動として農民によって自覚的に起きた運動であった。この民衆の宗教団体が権力を乱用し農民を搾取する官吏たちに対抗して農民の革命運動を起こしたのである(一八九四年)。
- (27) 『苦難の韓国民衆史』二九三頁。
- (28) 前掲書、三六二頁。
- (29) 「権力も文化も分散されていかなければ……(権オギ氏との対談)」『함석헌전집(제9권)』(雑誌『신동아(新東亜)』に一九六四年四月号のインタビュー記事として掲載されたものが咸錫憲全集に収録された)、한길사、ソウル、一九八三年十二月、四〇〇頁。
- (30) 日本語訳では、「天將、降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身、行拂亂其所爲、所以動心忍性、曾益其所不能」の漢字になっているものの、咸錫憲全集(原典)には、「天將、降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身、行拂亂其所爲、所以動心忍性、曾益其小不能」と表記されている。(『생각하는 백성이라야 산다(考える民でこそ生きられる)』(ハングル版『咸錫憲全集』第一四卷)、한길사、ソウル、一九八五年、三二三頁)。
- (31) 咸錫憲『考える民でこそ生きられる』(『咸錫憲著作集』第九卷) 仁科健一訳、新教出版社、一九九二年、一六九頁。

- (32) カトリック女子会館における老子・莊子研究会のこと。この会は一九七一年四月二七日に始まっている。
- (33) 『シアル革命の夢』(『咸錫憲全集』第八卷)、高崎宗司監修、四二頁。
- (34) 一九六一年八月『인간혁명』(人間革命)を出版し書いた文。『人間革命의 哲学』(ハングル版『咸錫憲全集』第二卷)한길사, ソウル, 一九九一年(第一〇版)、九二頁。